

館山支部だより Vol.126

＜支部連絡窓口＞
千葉県隊友会館山支部
事務局(代表) 川 村 巖
〒294-0032 館山市笠名1357
Tel. 0470-22-0230



《2月頃咲く花 デージー》
1年草、キク科で和名を「ヒナギク」
＜拙宅の庭先から＞

立春も間近かですが改めて新春のお慶びを申し上げます。
国外に眼を転じますと、イスラエル紛争の停戦が成立しましたが期限が過ぎた後がどうなるのでしょうか。また依然として解決の目処すら立たないウクライナ紛争の今後はどうなるのでしょうか。今年こそ一日も早い時期に状況の好転とともに 希望の持てる年になりますよう祈ってやみません。

会員・ご家族皆様方のご健勝ご多幸をお祈り申し上げます。

＜支部長 川村 巖＞

支部の活動概要

《12・1月の活動実績》

- 9(木) 第21空群司令年始表敬
(海自OB3団体代表)
- 1.31(金) 県隊友会部隊研修(下総基地)
2. 1(土) 1月支部役員会(コミセン、別法)

《2・3月の活動予定》

3. 8(土) 県隊友会後期支部長等会議(千葉市民会館)
- 3.20(木) 館山市戦没者慰霊祭(鶴ヶ谷八幡宮)
- 3.29(土) 年度末支部役員会(コミセン)

隊友新聞の配付に関するアンケート調査について

「隊友新聞(通称)」は、隊友会の機関紙として毎月1回定期的に発刊し、会員及び自衛隊部隊、関係先等に配付しているものです。近年、発刊経費の高騰に加えて郵便料金の値上げ等、隊友会の財政を大きく圧迫している状況に鑑み隊友会本部としてPC、スマホ等で手軽に閲覧できる隊友会HP掲載Web新聞(カラー版)の利用を奨励しております。

千葉県隊友会としても、限られた予算の有効活用の上からWeb新聞閲覧の普及を推し進めるため、隊友新聞の配付について、次のアンケート調査により皆さんのご意向を伺うことにしましたのでご協力お願い致します。 《館山支部長》

＜アンケート調査＞次の①、②いずれかを回答 極力メールでお願いします！

①紙面での新聞配付を希望

②紙面での新聞配付は不要(Web新聞閲覧)

回答先:館山支部長宛 回答期限:2025.2.28

メールアドレス g_marine@f5.dion.ne.jp

電 話 090-6497-6596

※なお、期限までに回答が無い場合は、②(配付不要)と見做すことにしますので予めご了承下さい。

＜Web新聞閲覧のためのパスワード等＞

隊友会本部HP:https://www.taiyukai.or.jp/membership/

ID : taiyukai パスワード: iwasaki3 (定期的に更新)

会員情報

古賀秀之会員(海)

野田市への転居(1/6)に伴い

千葉県隊友会野田支部へ転籍

館山支部会員として長年にわたりご理解ご協力有難うございました。
ご健勝とともにますますのご活躍を祈念致します。 <館山支部長>

令和7年度会費等の納入について

県隊友会の会務運営にとってかけがえのない資金源である会費等(年会費または会運営協力費)納入の時期になりました。同封の振込用紙で3月末までの納入にご協力お願い致します。
＜支部事務局＞

雑 想「ついつい源氏物語にハマり込む？」

昨年放映されたNHKの大河ドラマ「光る君へ」は、寝床に就く前の時間つぶし程度の軽い気持でしたが結局は最終回まで

欠かさず観ることになってしまったのです。やはり源氏物語に何か惹かれるものがあったのでしょうか。

中・高校の頃、国文学とか和歌にはさっぱり関心が持てず、源氏物語とか紫式部、清少納言の名前だけは頭にあったのですが知識は全く乏しかったのです。私の頭の中の日本史は平安朝時代が“空白”だったとも言えましょう。

昨年暮れの房日・展望台に、大河ドラマに飽き足らず谷崎純一郎の訳本「源氏物語」全54巻の読破に挑む記者の記事が載っていましたが、やはり日本人として源氏物語は一度は読んでみたいものですね。

源氏物語がつくられた由緒などを尋ねる

紫式部と著書「源氏物語」はあまりにも有名ですが、意外なことに題名とか作者については分からないことが多いようです。同じ時代に活躍した清少納言の場合は、著作「枕草子」の原本が現存しているのに比べ、源氏物語の原本は存在せず、平安末期から江戸時代にかけて書かれた沢山の写本、絵巻図や残された当時の文献等とともに多くの学者らの研究によって今日の源氏物語像が形造られたと言われております。

この源氏物語は、父が下級官吏を務めた関係で朝廷の女房(女官)として官仕えした紫式部が執筆したということですが、その動機については諸説あるものの真実は分からないと言ったほうがよいようです。そもそも物語の主人公の「光源氏」はあくまで“架空の人物”で、もともとは皇族・貴族のトップである天皇の子息として生まれ、何らかの事情で皇族の身分を離れて臣下として「源」の姓を賜ることになったという設定です。文武両道のイケメン、プレイボーイの「光る源氏」はいわば“あだな(綽名)”なのです。この光源氏のモデルになったのは、歌人で容姿端麗、色好みの在原業平やドラマの主人公左大臣の藤原道長などが挙げられております。

“世界最古の女流文学”と称される源氏物語は、30数箇国語に及ぶ翻訳を通じて世界中の人々に読まれていると言われます。生粋の日本人が読まないという手はない思うのです。とは言え全54巻(帖)からなり、800首近い和歌が詠み込まれた長編小説であり、硬直化した80歳後半の脳にはしんどいのです。この小説は、テーマの男女間の事柄や話の核心部分について文章表現ではなく、和歌によって彎曲、抒情的に描くという、現代の小説や物語には見られない特色的な手法がとられ、歌人としての紫式部の力量が全編にわたって発揮されていると多くの国文学者が評しております。必然的にこの和歌が理解できないと話の展開自体が分からないということになるのです。感性豊かな若い時代に読んで置くべきだったと悔やまれてならないのです。

ドラマの最後は「東夷の入寇」として、平安時代最大の対外危機として知られる津島・壹岐地方への“武装海賊集団の来襲”の話で締めくくられております。大宰府軍の奮戦によって見事撃退したものの、大宰府長官からの報告を受けた朝廷が天皇への上奏(報告)もしなければ、今後の対応を講じるための朝議も開かれなかったと言われております。

ここに栄華を極め権勢を欲しいままにした平安貴族の平和ボケ、国を守る意識の欠如とともに、やがてこれが桓武平家と清和源氏の二大武家勢力の台頭を許すことになった背景があると言ってもよいのではないのでしょうか。 <匿名、87歳>

「終戦処理文書『軍需品引渡目録』に見る報告部隊の思惑」

日本の降伏受諾とともに占領軍は日本本土への進駐に先立ち、兵器・武器類の破壊・隠匿の厳禁とともに軍需品等の目録の提出を要求した。引渡目録として申告するのは兵器・武器弾薬類に限らず敷地、建築物から軍需品、消耗品に至るすべてについて、作戦部から示された書式で各部隊が報告した引渡目録は部隊によりかなりの精粗が見られるが、旧軍の記録文書類の多くが焼却処分された一方で、防衛省防衛研究所に保存されている引渡証書は旧軍の状況、実態等を知り、類推する上での希少なドキュメントと言ってもよいであろう。

かつて館山の地にあった館山航空隊(「館空」)と洲ノ崎航空隊(「洲ノ空」)が報告した引渡証書の中に、意外と思われる点があるので経緯等について考えてみることにする。

なぜ館空と洲ノ空は「戦闘指揮所」を報告しなかったのだろうか？

部隊の作戦・戦闘指揮の中核である戦闘指揮所は、開戦時には基本的には建物(地上の施設)内に設けられていたが、空からの脅威が現実化するに伴い戦争中段のS18年8月、海軍建築部令の改定とともに戦闘指揮所の地下壕への移行(築城施設)に拍車がかけられた。終戦時には多くの部隊が地下壕式の戦闘指揮所を完成しており、引渡目録にも「戦闘指揮所」とともに装備機器を報告している。

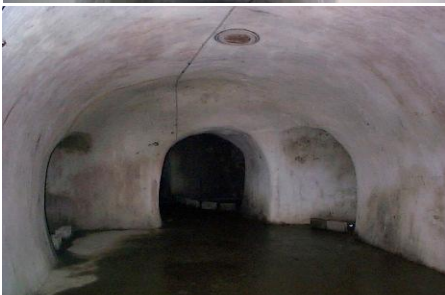
※館 空⇒構築物の一つとして「赤山防空壕」だけ報告されている。

館空はS19年12月に一旦解隊されS20. 5に再編成されているが、半年間の空白期間に加えて再編後さらに2階～4階部分の大きな拡張工事を進めたと考えられ、全体的に未完成のまま終戦を迎えている。 あえて戦闘指揮所とせずに「防空壕」としたのは“ボカす”意図があったとも考えられるが、その真意は定かではない。

※洲ノ空⇒「戦闘指揮所」について全く申告されていない。

以前にも紹介したことがあるが現在の蟹田婦人厚生施設敷地内の小高い山の中腹には、写真(左)のような「戦闘指揮所」と刻まれた看板とともに旧軍としては“極めて珍しい造作が施された”構築物が現存している。戦後の関係者の回想記には空襲時に実際に配置に就いて運用した記述がある。この戦闘指揮所は構造上は3階に位置し、1階から壕内の階段通路を経て昇降するようになっていたが、この昇降通路階段が落盤によるものではなく、明らかに人為的に埋められた形跡がある。終戦時、占領軍が爆破することも、まして関係の無い第三者が埋めることは考えられない。精魂傾けて完成させたものを占領軍によってむざむざと蹂躪されるに忍びなく、自分らの手で埋め立てて区画に出入りできないよう孤立状態にしたと考えるのが順当ではなからうか。これに類した事例はまだあるが紙面の都合で省略する。

《地域史探索マニア その49》



《洲ノ空戦闘指揮所壕跡》

現存する戦闘指揮所看板(上)と指揮所壕(下)。壁・天井はモルタル仕上げ。戦闘指揮所看板には昭和19年12月竣工と刻まれている。

指揮所に隣接して「作戦室(看板あり)」が設けられている。 <筆者注>